



ネムリスト

添削版



目覚め
民の

泣いてものが大事なの

最近睡眠から目を覚ますと、涙がとめどなく流れている。

背を丸めた姿はまるで二本足の猫だ。長い足と腕はゆっくりと動く。身体のラインを見せる受信スーツの上から白い布を羽織っている。ワンピースというよりも寝巻き姿の魔法使いだ。しかしその背筋から尻にかけての丸みは女だった。肩でざっくりと切り分けられた髪から覗くその目も、鼻も口も。

脈の拍動している？



トーストを焼き、冷蔵庫から取り出したハムとレタスを指で割いて大量に挟み込む。食べなくでは。食べなくでは。エロス大
電気を栄養分として生き物を生かす方法が確立された現代であっても、食事という行為は優先度の高い娯楽として人
気がある。排泄という尾籠な行為がついて回るが、個人の居住スペースで行われるというのならさして不快感はなか
った。

肉に染み込んだ塩味と小麦の練り物を焼いた香ばしいさくさくフワフワしたものをレタスのみずみずしさで押し込んでいく。電気ケトルが大きな湯気を吐き出して停止したので茶葉を白いポットに適当にぶちまけた。その間もずっとホットサンドイッチは口の中に押し込まれ続けている。これ以上睡眠をとるわけにはいかない。目覚めていないのは死んでいるのと同じだからだ。

ようやく自分が、自分でいる実感が出てくる。登録された名前を思い出す。人生を曖昧に。孤独の苦痛を忘却に。Dカサ・tokmasa＝白尾美は代用紅茶を啜りながらヴィジョンをつける。オートミックスに設定されたニュースが重要度の高いものと少ないものをかき混ぜて伝え始めた。

丁寧なわけだ？

た国をめぐらしたんじよ
道にたてた石のたて

あー
うー
うー

キヤスターさんといふ
フロウイングでなく、
度の高いものと少ないもの
をかき混ぜて仕え始めた

エロスとして人感
はなかな
栄美に
なるとこ

朝の景色

ぬむらぬい世界のちかぢか
おまこふんだから、さういふ
おまこふんだから、さういふ

今の子のうが、
ききえた

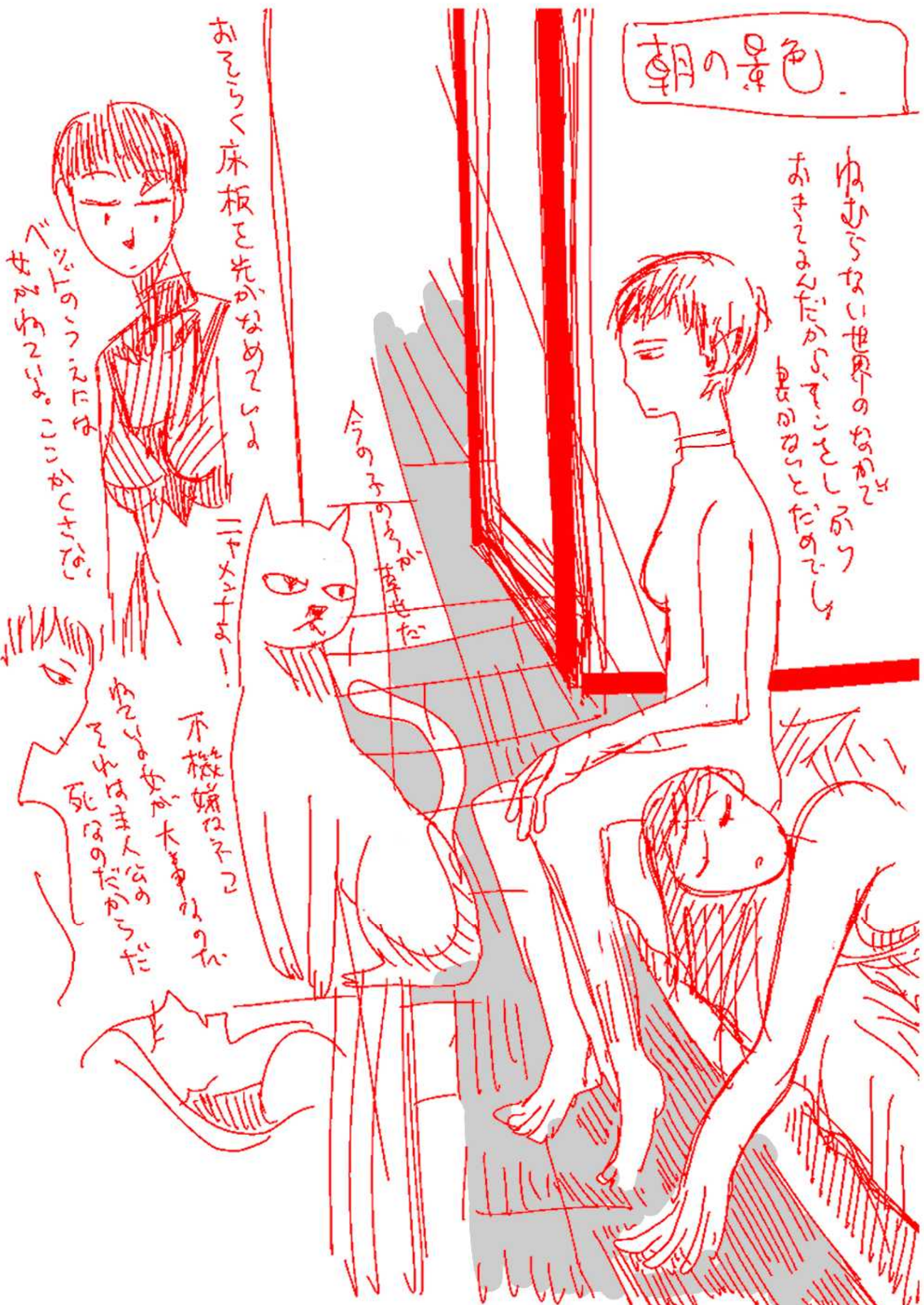
おそろく床板を光かなめていよ

ニヤメキスよー！

不機嫌なネコ
おまこふんだから、さういふ

おまこふんだから、さういふ
おまこふんだから、さういふ

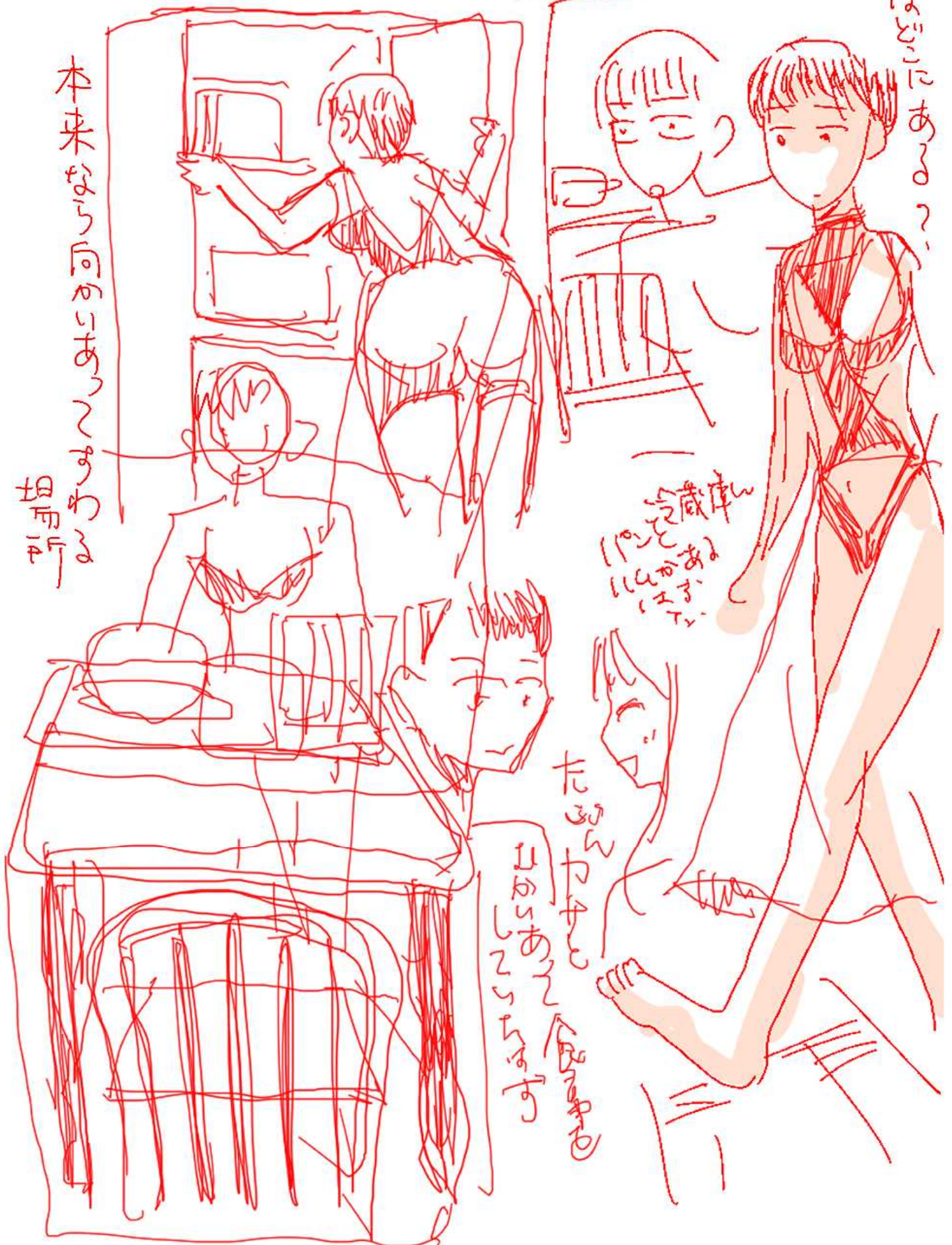
おまこふんだから、さういふ
おまこふんだから、さういふ



眠らなくなった世界にも冷蔵庫はある
かわらないよさ。

冷蔵庫にものがある

本来なら冷蔵庫はものがある
かき



はいはい
もっとあと

『睡眠代行機の普及は進んでおりません』
当たり前だけど、とDカサは歯ブラシを加えて思う。ミント味だ。真面目ぶった男と女が口元に笑顔を浮かべてわ
かりきっていることを、さも大発見であるかのように語るのが面白い。

『人間にとって眠りは人間の眠りだから価値があるわけだね。それが容易に機械では代行できないんですよ』
『眼球運動の疲労については解決したわけで、それは人体の学びから達成されているわけじゃないですか』

『しかし機械ではダメなのです』
『まっふあふわ』

『実際、睡眠代行は実際心地よいでしょう』
『まっふあふわ』

コメンテーターの一人の意見に賛同して、カサは薄く笑う。髪の毛を短く刈り込んだ彼女は、全くだ、と言ったの
だ。

フワフワの泡を注ぎ込んだ水と混ぜ合わせて口腔から吐き出す。味がなくなるまで繰り返して口を拭いた。側の鏡
を見ると目やにのついた切れ上がった目尻の女が映っていた。

「あー、瞼が重いわけだ」

瞼の奥から擦るように押し出すと、黄色く干からびたカスがボロボロとこぼれ出た。脳の裏がじわっと鈍い。多分
私はまだ眠っているのだろうと思う。目覚めは夢を見続けているのだ。

Dカサに

青空の下で人は眠らずに働き続ける。いや、動き続ける。肉体の疲労を人類は克服した。眠りによる癒しにより身
体を回復させる必要はなくなった。ただ記憶の蓄積たる脳のカスの処理作業と、凡庸な広告が残った。
睡眠代行はあなたの脳を綺麗にする。



自分と同じ顔の
ワサは



まっふあふわ

ほんとに大丈夫かな？
カサはうなづいてた



きめてオートマニョ
たれた世界。
だから人間が楽にはたけ
たからこそ人間が

たのしみ
カサはたのしみ

たのしみ
たのしみ

いーと
まどうと
大気中の
も保つ
飲む

スモはち
ないせ

たのしみ
たのしみ

たのしみ
たのしみ

たのしみ
たのしみ

だれか
キタ!!

サントウグサも
たひねる

だれだ
こいつ

ピンポンとベルが鳴る。珍しい。Dカサはまどろみから覚めて立ち上がる。誰であれ、ありがたかった。覚醒時
間が短くなっている。眠りのない世界の中で、こんなにも眠い。誰かと話すと少しはマシだ。

ドアを開けると、女がいた。年齢は自分と同じくらいだとDカサは思った。訪れた女はピンと背筋を伸ばしている。
髪は結びもせず腰の辺りに垂れている。時代遅れのTシャツは胸の盛り上がりを見え、ジーゼンズは重量感の
ある腰をしつかり支えていた。Dカサの顔を見た途端リラックスしたのがわかった。

彼女を見るといかに自分から生命力が抜けているかをDカサはわからされた。なにか食べなくては。目を開けてい
るだけでカロリィはみるみる消費される。

「ハイ」

軽く手を挙げる彼女を、Dカサはどこかで見た記憶がある。目覚めの中に置いてきたのかもしれないとDカサは思
う。目覚め、彼女はDカサにいくつか隠し事をしている。

「どちら様？」

と尋ねると「カサ、私はあなたを知っている」と彼女は笑った。

「それで充分では？」

「どういう意味？」

「会いたかったよ睡眠代行。いや、ネムリスト」

なるほど。

確かに彼女はDカサのことを知っているようだった。

静かに開けたドアはそのまま外と地続きになった玄関だ。来客はDカサの部屋に入ってくる。その足はまるで部屋

なこいつ



里野江
ア×カ
ア×。 | 44
12

10/11/2019

「お酒ないの」

ソファに腰をかけた客にDカサは「飲まないの」と答えた。

「飲むと眠くなる」

「相当ダメみたいね、カサ」

本当にこの客はDカサのことを知っているようだ。とりわけネムリストのことを。だが、Dカサのことは知らないのだ。Dカサはカサであつてカサではない。Dはダミーの意味だ。Dカサはカサのダミーなのだ。女はカバンから土産を出す。これ、と手渡されたのは豆の菓子だ。糖衣を纏った茶色い豆を皿にあける。好みの味だ。

「なにがダメなの？」

試すつもりでDカサは尋ねる。女は足を組んで客は豆を一粒こりこりと噛む。挑むような上目遣いが、微笑にかわる。Dカサが用意したコーヒーのカップを手にとって言った。

「眠りは社会からの死、これはわかるね」

「眠っている人間は、社会に関われない」Dカサは答える。女は笑う。

「そう。

だから、人間は起き続けることを選択した」

かつて人類は、眠らないことで成功を手に入れようとしていた。眠らずに努力をすることこそ必要で、ねむらない

ことは個人の楽しみを最大化すると考えていた。

「笑っちゃうね。問題はそんなことじゃないのに。眠っているということは死んでいるということ。眠っている間には社会から、集団から置いていかれる。そんな単純なことですらわかっていなかった。」
ねむろねこのか

この世界は
ちよつとちがひ

に。ぬむろないのか
あたり
まの
世界
仕事の能かとの
下になく

お酒

43

い
3
い
3
い
3
何
故

42

見
し
た
か
ら

る。
えみリストを日本産する
代~~主~~主人のつもとて
つくしたくひ、
設定はなこめ、
ちかうなこめ、

むしろそれと
伝へるべきかと

松はカサカサい
いはいの

ぐっと女はDカサに顔をよせてきた。びっくりして豆をとりこぼす。女は尋ねた。いま改めて気づいたが、彼女はとも愛嬌のある顔立ちをしてる。なのに口元だけ微笑して、食い入るようにDカサを見ている。必死な表情だと思う。それがなんだかDカサにとってはともうれしかった。

（こころで）
わめい



「ここまでひどいとは思わなかった。乗務員はどうしたの」

女の手がDカサの顔を掴む。荒々しく優しい。うっとりして身をあずけると、軽くはたかれた。痛い

「適切にダミーに交代しなさいよ。死ぬわよ」

「死なない」

Dカサは今日初めて、本当にうれしそうな顔をした。

「だって私はダミーの本体だから。」

「カサはずっと寝ている」

もっと早く説明

すべきたん

ネムリストは感応能力者だ。

人類は究極の共有、機器すらほぼ最小限にした意識の共有を行おうとした。だがそれが実用化されるのは今でないことを科学者たちは認めるしかなかった。

ただ、その繰り返しされる失敗が結局眠らずに済む人類を作り上げたことは賞賛に値する。

今まで以上に今を同時体感するためには、要するに資格が必要なのだ、と科学者たちは考えた。感応能力、他人と心を繋げることでできる能力を持つものでなければならぬ。この意識を共有できる者たちのメカニズムを解き明かすことで、人は映像出力機も音声機器も接触型体感機がなくても誰かと体感を共有できるようになるのだと。電気線

キズではだめ
waku to waku"

わたくしがネムリスト感応能力者
はいじめに
ニコんなよいし

「た人たちの夢を処理する」

下千くまは
いつもいめと
タネ明かし
つもりでしむのよぬ

木下 幸子

たかみ

「そう。はじめは交代をしていたのよ私も」
Dカサは言う。

Dカサは言う。

120000 - 40000 = 80000

本来のついでに



下

本
体

↓
本体の意志が
ダイナミクスに
日常をつくる。
しかしこれは
王権論。
意識と存在
(心) (心)

本件

→
いうないわけない。
その言葉の意味を
考へよう。

「おはようございます。」
「おはようございます。」
「おはようございます。」
「おはようございます。」

「私の半身はDカサ。あなただって気づいているでしょう」
Dカサは頷くしかなかった。

寝室に行く。そこには目覚めがいた。目覚めない目覚めが目を閉じて夢の中にいる。

カサだ。

「ネムリスト・カサ。オリジナル。」

「本体は一日に何時間起きているの」

「24時間」

「なんて？」

女が訊き返すのがおかしくてDカサは笑った。

「24時間ずっと寝ているの。私はその分、彼女の眠りを眠っている」

「あなたが彼女の目覚めの代行者のね」

カサは、Dカサよりもやせて、髪は長かった。電気ケーブルが鼻の穴に通る、口を使わぬ食事をおこなっている。
空気中の水分を取り込み、喉は渴かない。
内臓は適温のまま維持されている。再びつかうこともなく、ただ眠り続ける。

「行くよ」

「寝台に乗って、女が言う。ベッドにいて」

「私たちがアリスする必要はある」

「兎穴は一人用だよ」

「Dカサ、このままだと死ぬただだよ」

「夢だからアリスだー！」

「これはこのころ。すごいません。どんなおかしな夢か？」

なにこれ

カサ

どうやって？

ベッドメーカーさんだ？

フリー電線

なんでも電線

白鼻に

「アメ！」

Dカサは叫んだ。恐怖からでた声だった。女は驚いた顔をする。緊張は、指を収縮させる。Dカサは拳を固める。

「ダメだよアメ。夢は一人で見えるものだ。2人乗りは多すぎる。3人乗りはもっての他だよ」

女は自分の唇を撫でる。悩むとアメは、唇を人差し指で撫でるのだ。懐かしい気持ちに、Dカサは戸惑う。これは存在しない記憶。もう一人のダミーは、首を横に振った。

「まざりはじめている。あなた、私の名前を呼んだよ」

「え？」

「本体が秘密にしておきたかった秘密が、夢からダダ漏れになっている。溺れ死んでしまう。それと、言ったでしょ。」

私はDよ

Dは横たわるカサの手を握る。もう片方の手は、Dカサを手招きする。Dカサは恐れている。こんなことは初めてだ。誰かの手を介して、本体に触れるなんてことは。

「行くよ」

もう一度、Dが言った。

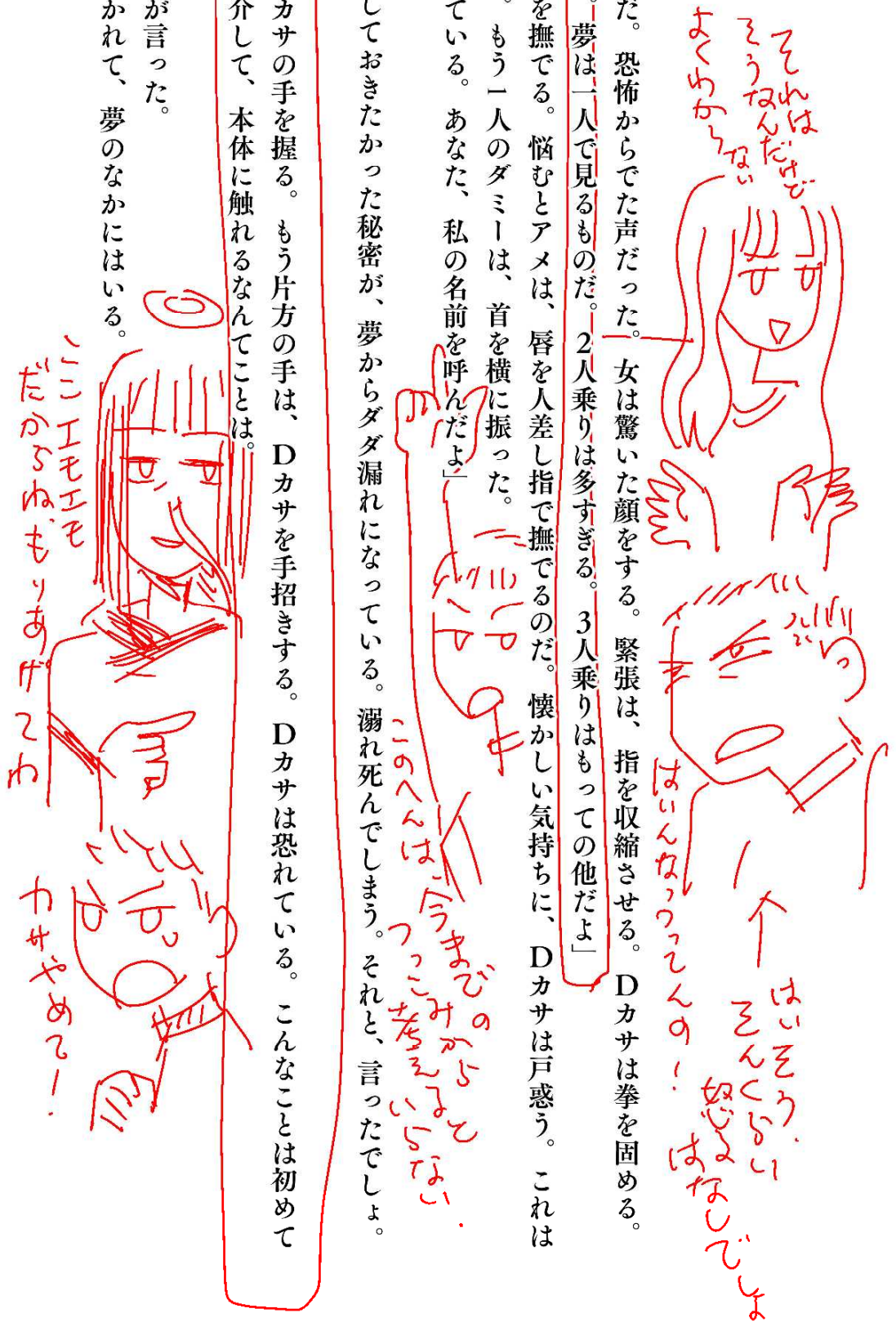
意識は強くひかれて、夢のなかにはいる。

黒い。

かつて色にまみれていた夢は、色がまざりすぎて真っ黒だ。かわきかけた墨汁のような泥がねっとり満ちており、ときおり蠢いている。微かな意識の光が、ギラギラする反射を生み出した。

DはDカサの手を引いていく。自信にみちた歩みは、一瞬泥濘に光の跡を残した。やがて乾いた砂が現れる。黒い粘液は砂で現れて、DカサとDはサクサクと白い道筋を歩む。これが正気だという。淀んだ夢のなかを歩める、唯一

SFの
でいた
甲斐



もしかしたら
カサの身体見た
とき

の正気。

のうがいも

そんな！

あやういあんた
おどろきだ
の

そりやおどろくやよいんそ
あんたがっつり知ってよけど

「迷いが無いね」とDカサがいうと、Dは、以前も見たことがあるからね、と言った。

「やがて、白い砂が失われたのも、見た」

やがてどこからか音が聞こえはじめた。荒い息づかいと、肉体が擦れる音だ。カサだ。

「へえ」

Dは感嘆の声をあげた。

「彼女は勇敢だね」

カサは剣を持っている。

剣を振るい、夢を断ち切っている。断ち切られた夢は息絶えて消える。ドロドロの地だけを残して。休みなく剣を振るうカサのもとにDカサは駆けていく。

「あたりまえでしょう。カサはいつだって勇敢だよ。知らなかった？」

尋ねるだけ無意味だと、Dカサは知っていた。Dもよく知っているはずだ。わかっているはずだ。Dカサにも、もうDが誰かはつきりわかっていた。

アメ・Kkblin4 || 黒野江。

カサがまだ、ネムリストになる前の友人だ。

カサは、アメのことが本当に好きだった。

「アメも選ばれたの」

とカサは聞いていた。言葉はいらなかった。カサもアメも感応能力者だからだ。カサが手で触れると、どんよりとした気持ちに移ってきた無味無臭の餅のような感情だ。できるかぎりカサのなかに苦いものを残さないように気をつ

いさなう
ツィ
こい
ゆ
わ
ちゃん

ゆたしは
よゆいよ
3
の
は
やサ。

もっとうまい
ニロいちあよびしよ

思いついた、カサの周りも色で表現してみよう。

カサの剣は原生生物にまで退化した、数多の触手ある平たい夢を刺し殺しながら言った。

「あたしの眠りのサポートをしないとダメでしょう」

「いつまでもあんたが起きてこないから、客が来たのよ」

「誰」

「あたしたちのことを、よく知ってる人よ」

戦う手を止めて、カサは眩しそうに目を細めた。Dカサはカサと夢の間に割り込んで剣を振るう。

「……ダレ？」

輝くDの、顔が見えない。ただ白い夢の砂山の上に立ち、このどろどろの夢の荒地を見ている。

「壮観だね」

Dが言った。

「眠りの海が夢を蓄えている」

「だからいったい誰！ 誰を連れてきたの、あたし！」

カサが走り出した。剣をもったまま。今までカサに襲いかかっていた黒い夢がすばやく足元を這っていく。てっきりカサを襲うのだと思ったら、カサを追い抜いて、砂山のDに向かった。

「ダメだよ」

Dが手を挙げた。

「それじゃあ、お前は逃げられない。私」

まばゆく輝くDの手の平に、這い寄る闇は霧散した。気がつけば闇がにように這いより、Dに飛びかかろうとしていた。Dの笑顔だけ見えた。蛇を焼きながら、Dは白い砂浜を歩いて行く。ジーンズに包まれたおしりが揺れる。この鬱屈した闇のなかでDは自由だった。おそれるように泥が逃げ出す。湿った砂は、雨上がりの庭だ。



くさい
説明
すげー

「ダメだ、私」

Dは言った。

「お前はもう死んだんだよ」

夢が裂けた。

その夢の黒い海の底を見て、Dカサは叫んでいた。

淀んだ夢の海の底に横たわっていたのは、真っ白くあまりに巨大なアメだった。

「アメ！」

Dカサの後ろで、悲痛な声が聞こえた。

カサが駆けていた。

「だめだ、だめだ、消えてしまう！ アメが消えてしまう！！」

「本体は死んだんだ、カサ！」

Dは叫んだ。

「私が、夢に交じって逃げ出したせいで、本体は死んだ。私は死ねないまま残された。私は死にに來ただけだ、カサ！」

カサまで死ぬ事ないんだ！！

カサは走るのをやめない。Dは舌打ちして駆けだした。Dカサは、手を伸ばした。Dは手を振り払おうとする。D

カサは離さない。

「一緒に、死なせてあげて」

「やだ」

「アメが、泣いている」

Dの顔が青ざめる。見れば、噤り泣くアメの裸体に、カサが抱きつくのが見える。

目頭にDカサが顔を
見て泣くか決めたね。

アメのよ、
夢に

アメ

しのか
奴い
たろ
が
よい
の
ひ
す
ー

なんのために
Dと記憶共有
したんだ
ハハ
Dカサが
たー



つまり人物関係は...

どうなふう？
すやうこむの
月元とキツてにきけるの？

何夢で
か？とは

わからぬのは、
は、
を、
です。

「もう大丈夫だよ」

とカサは言った。

「消えるときは一緒だ。一緒だったら、怖くないだろ」

「私は、あなたを消したくなかったただけなの」

アメは言った。

「だって、すり潰されかけたあなたを、夢の奥で見かけたから」

Dは呆然と立ち尽くした。

Dカサはその手を取った。

「もう死にたかったんだ」

そう囁いた。

「大勢の人の覚醒のために、夢を処理し続けるのが、くたびれて。」

重なる目覚めのなか、私たちははしやぎながら食事をして、夢のなかでお互いを剣で刺しあった。でも死ねなかつた。

だからカサは決めたんだ。

あたしはもう、眠り続けるって。だから眠っている間に、目覚めの世界の自分を殺してくれって。

私はカサを殺すことはできなかった。だから、目覚めの代行機になろうと思ったんだ。私が食べ、目覚めることで、

カサに生きる力を取り戻させようって思った。

2人で一緒に死にたかったのに」

「私にはわからない」

アメの
すきな長髪型に
アサと接続しうづめし
はかしづけた



自殺の
千つたいは
した。そ
アサの言
共々有さ
ず

アメは
自分だけ
の夢の中
カサと
一緒に

Dアメ



全部理
解精神
的た
自由

第一稿では本
全部知って
アメの本
当の計画
しる
よう

アメ

た性であり
愛の産物
カサのため
に
生きる。



まひめ

Dは呟いた。

「望んだ終わりじゃない。ただ、ようやく眠れる」

夢は身じろぎする。黒いどろどろの世界が逆流していく。足元は乾いていき、ただ清浄な白い砂だけになる。

2人のDは手を繋いだまま倒れた。空は真っ黒で星一つなく、やがて白けてなにもかも消えていった。

夢を押しつけていた人々が瞬間的な眠りに落ちたのは、ほんの数分のことだった。

目覚め続けた繁栄は数分の、逆流した夢によって大きく混乱した。

やがてすでに限界に達していたネムリストたちはその夢に呼応して、次々とためこんだ夢を吐き出していく。

人は飢えるほどに眠り。

夢は人を離すことはもはやなかった。

植物の緑や
血と花の赤など

色がたりない
のでモノクロームが
はきません

白けよめはさるくくす

白濁のだから、

白く消えていった。
でんり



夢の海から
巨世が
はいこむ

あまえは
ふつうに
うが寝たい

